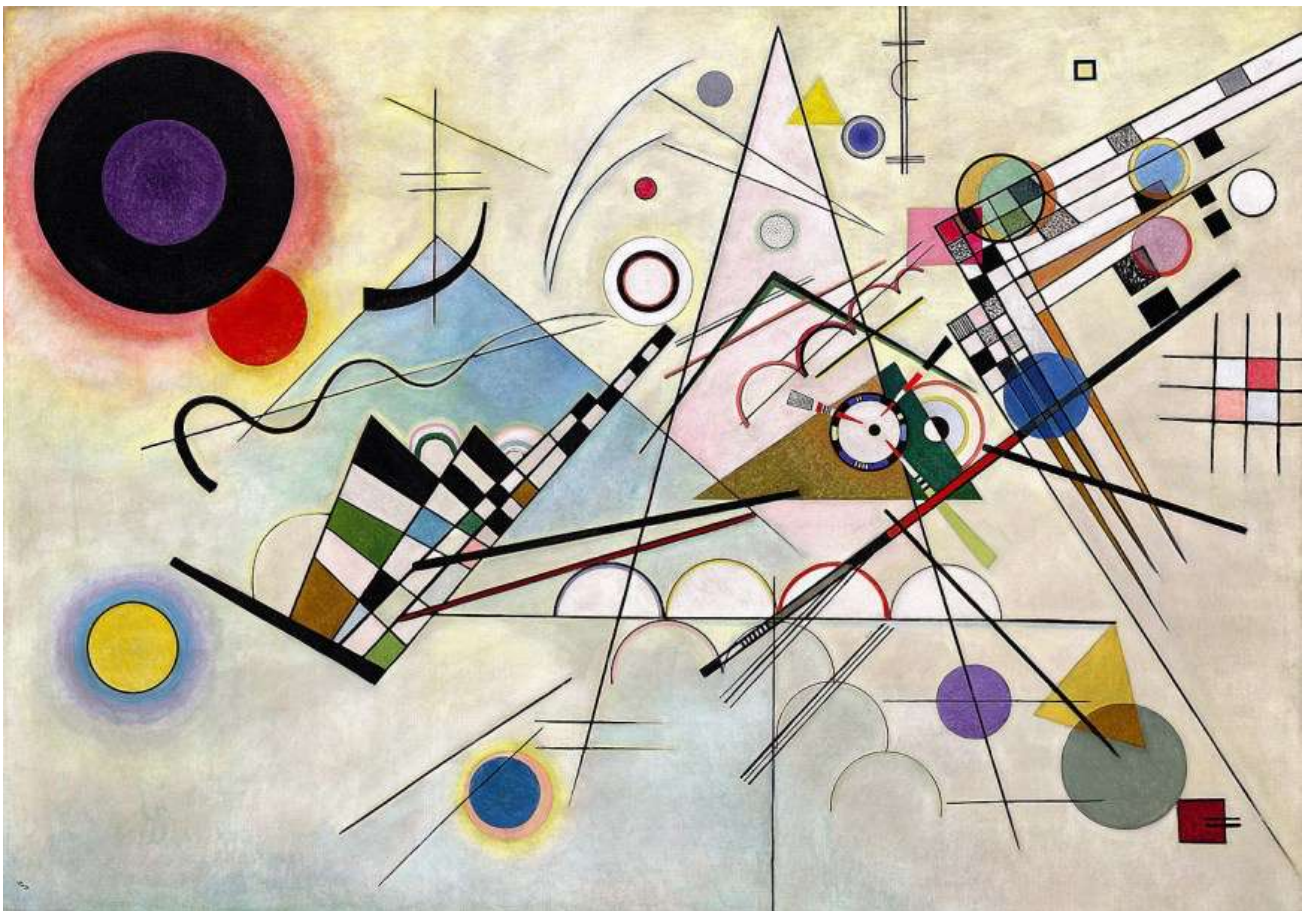
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 185

Website:「発達理論の学び舎」



© YOHEI KATO 2019

目次

3681. 社会に規定された人生を送る人：今朝方の夢の続き

3682. 絶えず描いた画家ピカソに会いに行く

3683. 午後の気づき

3684. 修練の時期

3685. 現代の地獄絵図：貧弱な人間観

3686. 貧弱な人間観と貧弱な教育：地球儀を眺めて

3687. フランス＆ベルギーへの小旅行計画：パリの楽譜専門店

3688. 楽譜専門店巡りと今朝方の夢

3689. 監獄の網の目と学制発布以来の教育

3690. 肥大化したセロリとブルーベリーを見て思うこと

3691. メロディーが現れる夢

3692. 今日の計画

3693. アーノルド・ショーンバーグに関する論文を読んで

3694. 神々の音を求めて

3695. 創意工夫の精神と形を生み出すこと

3696. 友人のギャンブルとインドの森に関する夢

3697. 気づきと夢の神様

3698. 冬の輝き

3699. 幸福は水の如し・呼吸の如し

3700. 感覚が劣化している現代人：日本語と存在の深まり

© YOHEI KATO 2019

3681. 社会に規定された人生を送る人：今朝方の夢の続き

時刻は午前七時に近づきつつある。つい先ほど、一日分のコーヒーを作り始めた。コーヒーメーカーが働いている音を聞きながら、窓の外をぼんやりと眺めている。どうやら、小雨が降り出したようだ。この時間帯はまだ真っ暗だが、小雨が降っている様子はわかる。窓ガラスに少しずつ雨滴が付着していく。

今日もまた、探究活動と創造活動に励む一日になるだろう。今日は協働プロジェクト関係の仕事もないため、一日中自分が従事したいと思う活動だけに取り組むことができる。

ここ数日間に引き続き、読書に関しては、12音技法に関する書籍、辻邦生先生の日記、そしてゴッホの手紙を読み進めていきたい。午前中は特に、辻先生の日記とゴッホの手紙を読み進めていこうと思っている。それに並行して、作曲実践を行っていく。今日は昼食前に、12音技法を活用した短い曲をまた一曲作ってみようと思う。その際には、書籍に掲載されている音列を活用し、さらには、掲載されている譜例を参考にしていく。とにかく実践を通じて新たな学びを絶えず得ていくようにする。

昨夜はふと、「多くの人はあまりに天才である。自分の限界を自ら作ることに関して」という言葉がふと脳裏に浮かんだ。人は思い込みをする生き物なのだが、なぜ多くの人は、自分に限界を設けるような思い込みをしがちなのかについて考えていた。新たなことを学ぶことや新たな実践を始めることに対して、人はあまりにも腰が重いのは、どこか自らが勝手に作った限界に縛られているからなのではないかと思う。

また、往々にして、こうした限界は社会がこしらえたものであるから、多くの人は結局、社会が自分の限界を決めることを許してしまっていると言えるだろう。社会的にプログラミングされた人生を送ることに対して、何も疑問を抱かないというのはどういうことなのだろうか？自らの人生が社会によって規定されていることに何の疑いも持たない多くの人たちについて、昨夜は改めて考えを巡らせていた。

昨夜の自分について思い出していると、一日分のコーヒーが出来上がったようだ。これからゆっくりと、今日一日の活動を始めていこう。今朝は目覚めの瞬間から、心身の調子が非常に良いことがわ

かった。確かに、今日も曇りがちな一日であり、雨も降るような日であるが、自分のライフワークに存分に取り組めることを思うと、自然と気持ちが明るくなる。

そういえば、先ほど書き留めていた今朝方の夢意外にも、まだ別の夢の場面があったことを思い出す。覚えているのはごくわずかだが、それも書き留めておきたい。

夢の中で私は、宿泊していた旅館の地下にいた。旅館の下には暗く、小さな通路が張り巡らされており、時々地下室のような広い場所に行き着くような構造になっていた。私と友人の何人かは、その狭い通路を一人一人がほふく前進しながら進み、時々行き着く広い場所で何かを探しているようだった。どうやら、私たちはお宝を探していたようだった。

縦横無尽に張り巡らされた通路をしばらくウロウロしていると、黄金色に輝く地下室に行き着いた。見るからにして、そこにはお宝が眠っているような雰囲気があった。友人と私は、そこに辿り着いたことをとても喜んだ。すると、後ろから誰か人の気配がした。どうやら、一人の見知らぬ男が私たちの後をつけており、私たちが見つけた宝を奪おうとしているらしいことがわかった。男が後ろから迫っていることに気づいた私は、その部屋の天井に飾られていたシャンデリアに備え付けられていた押しボタンを押した。すると、その部屋の形がみるみるうちに変形していき、そこで夢から覚めた。フローニンゲン:2019/1/15(火)07:13

No.1576: A Morning Doze

It sounds as if I had a calm morning doze. Our life should be always relaxing. Groningen, 09:27, Wednesday, 1/16/2019

3682. 絶えず描いた画家ピカソに会いに行く

「この春に、アントワープとパリに足を運ぼう」

そのようなことを昨夜ふと思った。

昨夜は、ピカソについてあれこれと調べていた。ピカソは生涯に、およそ1万3500点の油絵と素描、そして10万点の版画を残したことを知り、改めてその偉業に感銘を受けた。ピカソがこのように膨大

な数の作品を残すことができたのは、日々感じていたことを日記を書くかのように、毎日絵として表現していたからなのだろう。しかも、それは一日に一回日記を書く程度ではなく、一日に何度も日記を書くかのようにして、膨大な数の絵画を残していったのだと思う。まさに、日記を書くかのように曲を書くというのは、自分が理想としている境地であり、それを絵画において実現させていたピカソからは学ぶことが多々あるだろう。

ピカソはすでにこの世を去っているが、ピカソが残した膨大な作品群に会いに行きたいと突然ながら思った。そこで色々調べていると、パリに、国立ピカソ美術館という美術館があることを知った。この美術館には、ピカソ以外の画家の作品も所蔵されているようだが、とにかくピカソの作品を多く所蔵しているということを知った。それを受けて、ぜひこの美術館に足を運んでみようと思った。

地図を確認してみると、なんと今から二年半前にパリに訪れた時に宿泊していたホテルの直ぐ近くにこの美術館があることを知った。当時は、この美術館の存在を知っておらず、ここに足を運ぶことはなかった。二年半前にパリを訪れて以降、パリにはその他にもいくつか足を運んでみたい美術館や博物館があることに気づいていた。特に、音楽関係の博物館、端的にはパリにゆかりのある作曲家の博物館・記念館をぜひ訪れたいと前々から思っていた。ドビュッシー記念館やラヴェル博物館がまさにそうだ。

昨夜偶然にも国立ピカソ美術館を発見したのは何かの縁だと思うので、もう少し暖かくなったら、春にでもパリに足を運ぼうと思う。その際には、前々から足を運ぼうと思っていた隣国のベルギーを経由していく。ベルギーのアントワープに数日滞在し、そこからパリに向かう。調べてみると、フローニンゲンからベルギーのアントワープまでは列車で三時間半（乗り換え一度）、アントワープからパリまでは列車でわずか二時間（乗り換えなし）の距離である。列車でこのくらいの時間であるから、二つの都市はフローニンゲンからとても近いことが改めてわかる。もし、春の旅行の際に時間があれば、帰りはパリからブリュッセルに行き、ブリュッセルに数日滞在してからフローニンゲンに戻ろうかと考えている。

まずはパリの国立ピカソ美術館に足を運び、いずれはバルセロナのピカソ美術館にも訪れてみたいと思う。やはり欧州には、まだまだ足を運んでみたいと思う美術館や博物館が無数に存在してい

る。まだ確定ではないが、今年の夏から仮にアメリカに住むことになったとしても、また欧州に戻ってきて生活を始め、その際には欧州中の様々な美術館や博物館を活発に巡りたいと思う。

今は、春の小旅行が実に楽しみだ。そこでピカソや偉大な作曲家の溢れんばかりの創造エネルギーに触れることができれば幸いである。フローニンゲン：2019/1/15（火）07:47

No.1577: A Swaying Rose in the Winter Wind

The outside world became dark when I realized it. A swaying rose in the winter wind that I saw in my mind in the evening already disappeared. Groningen, 17:36, Wednesday, 1/16/2019

3683. 午後の気づき

時刻は午後三時に近づきつつある。今日も相変わらずの曇り空である。天気予報では雨が降る予定だったのだが、今のところまだ雨が降っていない。こうしたどんよりとした陰鬱な天気は、どうやら今週の金曜日でひと段落するようだ。

金曜日以降は晴れマークが付いており、日曜日に至っては、雲マークのない快晴との予報が出ている。それはそれで嬉しいのだが、金曜日からは、逆に気温が下がり、最低気温がいよいよコンスタントにマイナスになるようだ。これまでのところ、今回の冬は暖冬であったが、いよいよ寒さの厳しい冬がやってくる。

午前中、家の前の庭の木に止まる小鳥を観察していた。その小鳥はキョロキョロと頭を動かしており、どこか冷静かつおどけているように見えた。世界は常に冷静であり、おどけている。そうした世界の中で生きる人間だけが冷静ではなく、おどけてもいない。

昼食前に12音技法を活用して曲を作ってみた。当然ながら、うまくいかないことの方が多く、響きも相変わらずのものだが、それでも瞬間的に自分なりの美がそこに芽生えていると言えなくもないということに気づいた。いかなる作品を作ろうが、そこに不可避に滲み出してしまうもの。それこそが作り手の個性というものだろう。

曲を作り終え、いつものようにその曲から喚起される感覚を絵として描いていた。このところ思うのは、12音技法を活用した時の絵は、調性のある曲を作った後に描く絵と随分と異なる雰囲気を持っているということである。やはり、調性のある曲と調性のない曲とでは、喚起されるものが歴然と異なるようであり、それは絵にも現れることが明確になっている。ふとした閃きで、調性のある音楽、ない音楽にかかわらず、絵を描くときには、カンディンスキーの絵を少し参考にしてみようと思った。

それともう一つ気付いたこととしては、よくランニングに出かけた後や、ヨガの実践をした後に、何かしらの文章を書くと、身体運動の前後ではやはり感覚が異なっており、生み出される文章に変化が見られるということだ。それと同じことが作曲においても当てはまる。作曲をする前後では、やはり意識と身体の双方に何かしらの変化が起こっており、作曲実践の後に文章を書くと、その変化を感じ取ることができる。これは作曲実践そのものが、実は意識と身体を伴う実践に他ならないことの表れなのだろうか。

そのようなことを考えていると、作曲実践はやはり自分の心身に大きな影響を与えており、自らの思考ないしは知性に少なからぬ影響を与えていることがわかる。作曲実践によって、自分の中の何かが癒されたり、何かが変容したりすることが生じており、それが自己の変容につながっていることを日々実感する。とりとめもなく考えが続くが、今後も日記の執筆と作曲実践を相互補完的に継続させていき、小さな発見事項や気づきもつぶさに記録しておくことにする。フローニンゲン:2019/1/15(火)14:58

3684. 修練の時期

これから本日三回目の作曲実践を行いたい。ラヴェルのいずれかの曲に範を求めて、一曲ほど作る。今日は昼食前に、12音技法を用いて作曲を行い、その時の経験をもとに、次回どのような曲を作るかを少しばかり考えていた。次回12音技法を用いた作曲をするときには、実験的に、極端に高い音と極端に低い音を中心にして曲を作ってみようと思う。もちろん、通常の高さの音も使っていくが、それは時折挿入する程度にしてみる。こうした実験をしようと思ったのは、今回の作曲実践を通じて、通常よく用いられる音域に音を鳴らした場合、どうしても汚く響きすぎてしまうことが多いが、極端に高い音や極端に低い音を使ってみると、不思議とそうした汚さが和らいだように感じたからであ

る。もしかしたら、この感覚の背後には、何かしらの理論があるのかもしれない。それもまた探究ポイントとなる。

12音技法のみならず、作曲全般に関しては、とにかく試行錯誤と実験の連続である。曲を作っていることは「実践」というよりも、失敗をして、失敗から気づきや発見を得るための「実験」と呼んだ方がふさわしいように思えてくる。

昨夜月を見上げながら、音楽的知性について考えていた。それを涵養することはいくつになってからでも可能であるということを、自分自身を実験台として検証していく試みを続けていく。

生み出される曲の質について考えるのは、少なくとも10,000曲を作ってからでいい。それまでは実験と修練あるのみである。10,000曲を作った経験がない中で質についてあれこれ考えてもほぼ無意味だろう。もちろん、その時その時の作曲実践において質は意識するのだが、それはもうたかが知れているのは十分に分かっている。10,000曲作るまでは、ほぼ間違いなく準備期間であり、今は曲を作ることに関する土俵にすら立っていないのである。

モーツァルトが五歳ぐらいの時に書いた曲には本当に驚かされ、ピカソが八歳で描いたデッサンには感嘆の声を上げずにはいられない。彼らにはやはり才能があったのだ。才能を持った彼らでさえ、絶えず創造することを通じて技術を磨き上げていったプロセスには本当に感銘を受ける。

幸いにも、モーツァルトからは絶えず創造エネルギーを共有してもらっている。それに何より、実際にモーツァルが活躍したウィーンとザルツブルグを訪れ、モーツァルトの博物館を訪れたことにより、よりモーツァルトが近しい存在に感じられるようになった。やはり今年の春は、パリの国立ピカソ美術館に足を運び、ピカソにより親近感を感じられるようにしたいと思う。仮に国立ピカソ美術館に足を運べば、ピカソの絶え間ない創造の秘密を知ることになるだろう。それは言語的な気づきとして得られるかもしれないし、非言語的な体感的なものとして得られるかもしれない。いずれにせよ、ピカソから何かしらの創造エネルギーを共有してもらえるような気がしている。こうした他力の力を借りながらも、自助的な修練を積み重ねていきたい。

今、こうした日々を送ることができていることを改めてとても有り難く思う。同時に、こうした生き方そのものが、自分に与えられた一つの役割であり、その役割を全うするための必然的なものであるとも

感じる。このような生活は、一見すると、退職をして自由の身になった人の生き方と似ている。私は、こうした生活を30歳を前にした時から送れるような幸運を得た。

もしかしたら、25歳の時に会社を辞めた時に、すでにこうした生活の一部が始まっていたのではないかとすら思う。日々の生活において、これ以上ないほどの充実感を感じているのは、決して悠々自適な生活を送っているからではない。それよりもむしろ、絶え間ない修練がそこにあるからこそ、日々が充実感に満ちたものに感じられているように思う。

自分にもいつか老年期がやってくる。その時に、自由自在に曲を作れるようになっているために、これからの日々の修練がある。修練の時期が後10年ほど続いたとしても、それは奇跡的なほどに短い。今はとにかく修業の時期であり、作曲技術の基礎、そして音楽理論をどれだけ時間がかかっても構わないのでゆっくりと継続して学んでいく。

こうした生活をやめるときは、自分が人間であることをやめるときであり、自分が人間としての生を存分に生きるためには、このような生活をこれからも絶えず送り続けていく必要がある。フローニンゲン：2019/1/15（火）15:29

3685. 現代の地獄絵図：貧弱な人間観

つい今しがた夕食を摂り終えた。これから就寝までの時間を使って、本日を締めくくる活動に従事していく。

夕暮れ時に降り始めた霧雨が、今もまだ降っている。それを眺めれば眺めるほど、自分の感覚も霧雨のように微細になっていくかのようだ。

先ほど夕食を食べている最中に、改めて、ルドルフ・シュタイナーの人間観に打たれるものがあった。これは突然の気づきであった。

私がフローニンゲン大学にやってきて二年ほど従事していた発達研究は、複雑性科学を用いたものだった。確かにそこでは、「複雑性」という概念を用いて人間発達を探究していくため、人間を複雑な存在だと見なしている。しかし、結局そこで共有されている人間観というのは、人間が本質的に

持つ複雑性に全く及ばない、より厳密には、ごく一部の領域における複雑性しか扱っていないということに気づくことができる。端的には、そこでは本来人間存在において最も重要だと言っても過言ではない霊性に関する議論が完全に抜けて落ちてしまっているのである。これは複雑性科学のみならず、人間を扱う他の科学領域にも等しく当てはまる事柄である。

そうした観点において、複雑性科学を用いた発達研究が、人間発達の複雑な側面を探究しているかと言えば、全くもってそうではない。今のところ、霊性の科学もほとんど発展しておらず、そうした状況下において、なお一層、シュタイナーが展開していた人間観に価値を見出せるのではないかと思う。

既存の科学的なものの見方は、人間存在を実に単純に扱っている。おそらく研究上、人間存在の局所的な部分に注目をしなければ研究ができないという事情があるのだろうが、それにしても、そこで共有されている人間観は極めて単純なものであり、お粗末なものである。科学の領域おける人間観が極めて貧弱になればなるだけ、科学を盲信する現代人は、そうした貧弱な人間観を自身の内側に構築していく。こうした悪循環が現代社会に蔓延しているように思えてならない。

確かに、シュタイナーは霊性の科学を提唱しているが、彼の主張の大部分は科学的な枠組みから検証するのは極めて難しい。しかし、私がシュタイナーに敬意を表しているのは、人間が本質的にもつ霊性にまで踏み込みながら、決して貧弱な人間観を構築しなかったことである。むしろシュタイナーは、実に豊かな人間観を構築しており、それには打たれるものがある。思うに、現代の科学で検証できないようなことを切り捨てるのではなく、むしろそうした側面を絶えず尊重していくことをしなければ、今後ますます人間観は貧弱なものとなり、それはすなわち、人間存在の危機につながってくるのではないかと危惧している。

人間を矮小化しようとする目には見えない大規模な運動が、この世界で着実に進行している。機械のような人間、家畜のような人間、魂の抜けた人間が溢れる現代社会を見れば、それを疑うものは誰もいないのではないだろうか。そして、これは現代における地獄絵図だろう。しかし、最大の地獄絵図は、相も変わらず、単純な人間観を盲信し、水面下では人間の機会化・家畜化、および魂の略奪が起こっているにもかかわらず、人々がそれに気づけていないことだ。現代に描かれた地獄絵図に気づけないことが、この世界の最大の地獄絵図だ。フローニンゲン：2019/1/15（火）19:50

3686. 貧弱な人間観と貧弱な教育：地球儀を眺めて

日記をたった今書き留めたところなのだが、もう少し何か言葉を外に形として残しておきたいという衝動がある。

先ほど、現代社会に蔓延している貧弱な人間観について言及していた。こうした貧弱な人間観は、直接的に教育を含めて、様々な領域に影響を与える。一番わかりやすいのは教育の世界であり、貧弱な人間観の元には貧弱な教育しかなしえないのではないかと思う。あれこれと名前だけ科学的なアプローチを用いて考案された教育手法が、ことごとく浅薄なものに見えるのは、そこでは矮小な人間観に基づいた教育研究がなされていることに大きな理由があるだろう。

そして、そうした矮小な人間観に基づいて発見された事柄を元にした、貧弱な教育アプローチを採用していくことによって、教育はますます貧弱なものになっていく。端的に述べれば、人間を機械のように見なすような発想を元にした研究成果をいくら活用しても、結局、機械のような人間しか育むことができないのではないだろうか。実際に、いくつかの科学領域は、人間を複雑な生命として見なすという発想よりも、機械として見なすような発想の方が優勢であるように思えるものがある。そうした発想の元になされる研究とその研究成果に頼った教育は、ことごとく人間をより矮小な存在に追いやっていく。

そうした状況に人々が気付けないのはなぜなのだろうか。もしかしたら、それほどまでに事態は深刻なものになっているのかもしれない。すでに私たちの大部分は、機械化され、家畜化されてしまっているのかもしれない。機械は自分が機械であることを認識することはできないだろう。家畜もまた然りである。

フローニンゲン大学で科学的な研究に従事した結果として戻ってきたのは、トランスパーソナル心理学、実存主義的心理学、そして霊性学とでも呼べるような探究領域だった。ブラヴァツキー、シュタイナー、オーロビンド、グルジェフなど、とりわけ彼らが探究をしていた人間の霊性について、再度自分の中で関心の熱が高まっているのは、現代社会のこうした有り様によるものかもしれない。

今日はこれから、モーツァルトに範を求めて作曲実践を行う。その後、ハーモニーに関する専門書を読み進めていく。

少しばかり小雨が収まり、今は再び窓の外の世界をぼんやりと眺めている。そういえば、昨夜はこの時間あたりに、Google Mapを活用して、世界の様々な地域について調べていた。地図上で間違って拡大ボタンを押しすぎてしまった時、地図が地球儀のような形になった。これは昔からあった機能なのかもしれないが、地球儀を眺めていると色々と面白いことに気づいた。例えば、私はてっきり、アフリカ諸国は基本的に砂漠地帯が多いものだと思い込んであり、地球儀を通してみると、むしろ半分の国々は緑豊かなようだった。また、改めて感慨深く思っていたのは、地球はやはり広いということであった。

地図上には私が過去に足を運んだことのある地域に印が付けられており──自分が印をつけているのだが──、それらを見ると、私は地球上のごく一部の場所にしか足を踏み入れていないことに気づかされた。また、私が住んだことのある国も地域も、実は極々わずかなものでしかないことに改めて気付かされる。

地球の様々な地域の地形を眺めながら、そこでしか涵養されえぬ固有の人間性ないしは精神性について思いを馳せていた。これからも引き続き、私はこの地球上を転々として生活をし、自分を呼ぶ場所へ少しずつ足を運んでいくのだと思う。フローニンゲン:2019/1/15(火)20:12

3687. フランス&ベルギーへの小旅行計画:パリの楽譜専門店

今朝は六時半に起床し、七時から一日の活動を始めた。七時を迎えると、辺りは真っ暗闇に包まれているにもかかわらず、人々が活動している様子がちらほら見えた。遠くの通りを行き交う車や、目の前の通りを行き交う自転車を見ていると、その様子がわかる。今日は週の半ばの水曜日である。今日もまた、自らの取り組みを着実に前に進めていこうと思う。

本日は、午前中に一件ほど、協働者の方とのオンラインミーティングがある。それ以外は特に何もないので、今日も自らの探究活動と創造活動に十分な時間を充てることができるだろう。

昨日は、今年の春に予定しているフランスとベルギーの小旅行について書き留めていたように思う。パリにおいては、国立ピカソ美術館とドビュッシー記念館に足を運ぶことを大きな目的としている。また、パリに足を運んだ際には、市内の書店の中で、楽譜を専門に扱っている何軒かの書店に足を運びたいと思う。そこでいくつか、自分の関心を引く楽譜を購入したい。例えば、メシアンの楽譜

などがあれば、それは是非とも購入したいと思う。パリに行く前に立ち寄るアントワープに関しては、まだ特にどこに足を運ぶかを決めていない。間違いなく、アントワープにある大きな美術館には足を運ぶ予定だが、どのような美術館があるのかはこれから調べていく。昨夜は、この小旅行を春まで待てないような衝動と期待感があった。

よくよく考えてみると、春までの時期は、比較的自分の時間を作りやすく、旅行をする時間が十分にあると言える。一方で、春からは新年度を迎えることもあり、協働プロジェクトを含め、少しばかり慌ただしくなるかもしれないと考えていた。だが、この時期のヨーロッパはいかんせん寒さが厳しいので、寒い中をわざわざ旅行しなくてもいいのではないかという気持ちがなくもない。そうしたことを考えると、やはり今回の小旅行は春に行おうと思う。ただし、四月ではなく、少し早めに三月のどこかのタイミングで旅行するのも良いかと計画している。気が変わって、二月の末辺りに旅行を敢行するかもしれないが、それもまた良しとする。

つい今しがた、パリにある楽譜専門店を地図上であれこれと調べてみた。すると、かなりの数の専門店があることに驚いた。市内の中で、四店ほど足を運んでみようと思う店を見つけ、地図上に印を入れておいた。どの店も楽譜の品揃えが良いようであり、楽譜以外にも音楽関係の書籍を扱っているようであるから、四つの店であれこれと吟味しながら、自分が必要だと思う楽譜や書籍を購入したい。

ここ最近思うのは、楽譜がもはや自分にとってなくてはならない研究資料になっており、同時にそれは作曲の際の実践の手引書の役割を果たしているということである。自分にとって楽譜は、作曲に関する研究と実践をより豊かなものにしてくれるという認識を持ち、これからも積極的に購入していく。世界の様々な書店で購入する楽譜には、特別な思いが宿り、それらはすべて自分にとっての宝物になるだろう。フローニンゲン：2019/1/16（水）07:37

No.1578: Fragments of Shooting Stars

It seems to me that I always have fragments of shooting stars. Groningen, 21:33, Wednesday, 1/16/2019

3688. 楽譜専門店巡りと今朝方の夢

時刻は午前八時を迎えようとしている。今、一日分のコーヒーが出来上がり、そろそろ一日の活動を本格的に始めようと思う。

昨日は、辻邦生先生が二度目のフランス滞在中に執筆した日記『冬の霧 立ちて』を最初から最後まで読み終えた。今日からは、季節としては少々早いが、続きの巻である『春の風駆けて』を読み始めようと思う。日記の舞台となっているのは、今から40年ほど前のパリであり、日記を読んでいると、当時のパリの様子が全く古さを感じさせずにありありと伝わってくる。それはもちろん、辻先生の見事な文章のおかげもあるだろうし、何よりも、辻先生がパリの中で真に生きていたがゆえに、パリの様子が迫真性を伴ってこちらに伝わってくるのだろう。

辻先生も日記の中で、パリの冬の厳しさについて言及していたが、改めて先ほど、フローニンゲン、アントワープ、パリと、春の小旅行の際に足を運ぶ場所の気候を調べていた。すると、当たり前かもしれないが、フローニンゲンから南に行く連れて気候が暖かくなり、寒さという観点でみれば、アントワープはパリよりも厳しく、フローニンゲンはアントワープよりも厳しいことがわかる。特に、一月と二月のフローニンゲンの寒さが際立っている印象を受けた。そのようなことを言えば、北欧諸国はもっと寒さが厳しいのであるから、この世界は本当に実に様々な場所があるのだということに気づく。

先ほど、パリとアントワープにある楽譜専門店を調べていた。これまでは、古書店という観点は常に私の頭の中にあり、大抵旅行中は、その街の古書店に足を運んでいた。そこで運命的な出会いをする書籍を見つけた時には、感激もひとしおである。

今回の旅行から、楽譜専門店という観点が私の中に加わったことは嬉しいことである。これからは、旅先で古書店を巡るだけではなく、むしろ古書店を巡ることよりも優先させる形で、楽譜専門店に足を運びたいと思う。フローニンゲンにも楽譜専門店はないだろうかと調べてみたところ、幸いにも一件ほど見つけることができた。見ると、随分と品揃えも良いように思えるので、近々散歩がてら、その店に足を運びたいと思う。

時刻は午前八時を迎え、ゆっくりと空が明るくなり始めている。明日まで天気が悪いようだが、明後日からは晴れの日が続く。

ダークブルーの空を眺めながら、今朝方の夢について思い出していた。今朝は、それほど記憶に残る夢を見ていなかったが、覚えている限りのことを書き留めておきたい。

夢の中で私は、実際に通っていた高校の体育館の中にいた。そこでは、これからフットサルの試合が行われるようだった。体育館を半分に区切り、フットサル用のコートが二面そこにあった。私は、体育館の入り口に近い方のコートで行われる試合に参加することになっていた。

チームのメンバーは事前にくじを引き、引き当てられたくじの番号によってポジションが割り振られた。私が引いた番号は、「3」であった。3番がどこのポジションを担当するのかわからなかったかので、体育館の壇上近くにあるホワイトボードを確認しに行ったところ、3番は一枚のセンターフォワードを担うことになっていた。5番のくじを引いた私の親友(NK)は、フットサルの技術が高く、アシストがうまい。そんな彼が私の後ろのポジションを担当することになったため、私は大きな期待感を持って試合に臨んだ。試合が始まってみると、両チームの力の差が歴然としており、私は大人げないほどに、とにかく淡々と得点を積み重ねていった。フローニンゲン:2019/1/16(水)08:15

No.1579: A Heart Breaking Through Severe Winter

What comes from us when we are in a severe environment? For me, only laugh comes from the inside of myself. Groningen, 09:26, Thursday, 1/17/2019

3689. 監獄の網の目と学制発布以来の教育

時刻は午後の三時半を迎えた。これから夕食に向けて、再び仕事に取り掛かっていく。

先ほどまで小雨が降っていたのだが、どうやら雨は止んだようだ。時刻はまだ午後三時半なのだが、もう辺りは薄暗い。いや、今日は一日中、このような薄暗さの中にあったように思う。

先ほどまで、いろいろと雑多なことを考えていた。一つは、書き手の実存性が滲み出てくる余地がほとんど無い科学的な論文形式で書かれた文章は味気なく、一方で、そうした事態に問題意識を持ち、仮に科学的な論文形式であっても、なんとかして自分の深層的な課題意識を文章として表現しようとしている著者の文章は面白味を感じる、ということであった。今日もそのようなことを感じさせる瞬間があった。インテグラル理論の提唱者であるケン・ウィルバーの言葉を用いれば、やはり依

然として、学術世界は合理性段階（オレンジ）と相対主義的段階（グリーン）の巣窟と成っており、それら二つの段階に依拠するナラティブはどちらも共に物足りなさを感じることを認めざるをえない。一方で、合理性段階の壁を乗り越え、相対主義的段階の壁を乗り超えた学者も少なからず存在するわけであり、彼らの洞察からは色々と学ばされることが多い。

彼らの洞察の特徴としては、この社会に張り巡らされた抑圧的な檻の網の目、ないしは監獄の網の目に気づいていることであり、彼らが執筆した書籍や論文を読む意義は、そうした監獄の存在に気付き、そこから解放されることに向けてのアクションを考察できることにあるだろう。

この現代社会には、それこそ目には見えない無数の監獄が存在しており、まずはその存在に気づくことが重要であり、それらの監獄がいかなるメカニズムによって動いているかを理解することが重要だろう。そうした記述がなされている文献を今後も積極的に読んでいこうと思う。

もう一つ考えていた雑多な事柄は、1872年に発布された「学制」に基づいて連綿と継続している我が国の教育についてであった。1872年に発布された学制において、教育の目的は、出世と財の獲得・管理に置かれていたということを知った。そこでは、経済的な成功が教育の第一目標に据えられていたのである。学制によって制定された価値観は、150年近く経った今でもまだ存続しており、そうした価値観の刷り込みは依然として払拭されていないように思える。ただし現在は、教育の世界においては、そうした価値観は少しずつ揺らいできてはいるようだ。

経済活動における成功を第一とする教育は、もう完全に時代の要請に応えることができていないのは自明だろう。学校を取り巻くシステムについては、引き続き探究を継続していきたい。それに関連して、社会学や経済学、さらにはより具体的に、教育社会学の書籍を再び読み進めていこうと思う。
フローニンゲン：2019/1/16（水）15:52

No.1580: An Illusory Eureka Moment

My life is rife with eureka moments. Groningen, 14:56, Thursday, 1/17/2019

3690. 肥大化したセロリとブルーベリーを見て思うこと

時刻は午後の八時を迎えた。夕方に止んでいた雨が再び降り始め、小雨がぱらついている。

夕方に、ふと顔を上げると、目の前の世界は真っ暗になっていた。そこから今に至るまで、闇の世界が広がり続けている。

私は普段、肉、魚、野菜、果物、パン、チョコレートに至るまで、自分の体に取り入れるものは全てオーガニックのものにしている。昨日、有機栽培されたセロリの封を開け、一本セロリを取り出してみたところ、それがあまりにも巨大であることに思わず笑った。先日も、有機栽培のブルーベリーを食べている時に、一粒一粒が通常よりも大きいことに気づいていた。そこから、今から一年半前にノルウェーを訪れた時に、宿泊先のホテルで見た、南極のドキュメンタリー番組をふと思い出した。そこで特集されていたのは、南極において肥大化する生物たちであった。そこではプランクトンですらも肥大化しており、プランクトンが肥大化していることから連鎖する形で、様々な海洋生物が肥大化しているようだった。実はこのドキュメンタリー番組については、以前にも何度か触れたことがあるように思う。極めて厳しい環境の中で、大きく育つ生命たちの力には打たれるものがある。

フローニンゲンで生活するこの三年間を振り返ってみると、南極の生物たちが肥大化するのと同じようなことが自分にも起きていることに気づく。こうした厳しい環境でしか育まれない精神と感性が間違いなく存在している。それに疑いはない。

肥大化したセロリとブルーベリーについて思い出しながら、そのようなことを思った。それともう一つ、特に有機野菜を食べることの良さは、それが季節の進行と共に見た目も味も変えることに気づき、自分が地球の動きと連動して生きていることを実感できることにあるだろう。

地球という大きな生命と自分が連動して生きていることを強く実感することができる。それもまた、有機野菜を食べることの良さだろう。

夕食前に、現代の学校でなされている奇妙な慣行について改めて考えていた。よくよく考えると、毎日決められた時間に学校に行き、同い年の人間と狭い空間の中で学び続けることが義務化されていることに違和感を覚えたのである。そもそも、同い年とあれだけ固まって集団生活を営むというのは学校以外においては考えられず、ひとたび社会に出ると否応なく様々な年代の人たちと協働していくことになる。単純に年齢で区切られている学校制度には、どこか違和感がある。

© YOHEI KATO 2019

そうしたことをひっくるめて、やはり現代の学校教育を取り巻くシステムは、目には見えない人民統制メカニズムとして機能しているように思えてくる。そして、形を変えて、似たような人民統制メカニズムが企業社会においても見られる。こうした目には見えない社会的な力とそのメカニズムに気づいていた(気づいている)学者の書籍や論文や引き続き読んでいきたいと思う。このテーマには絶えず自分の関心があるようだ。フローニンゲン:2019/1/16(水)20:15

No.1581: A Path for Moonlight

It represents a path for moonlight, which extents somewhere far away. Groningen, 17:19, Thursday, 1/17/2019

3691. メロディーが現れる夢

今朝はゆったりと七時に起床し、七時半を少し過ぎたところで一日の活動を始めた。今、辺りは闇に包まれているのだが、向こう側の住宅地の道路に、ピカピカと光るトラックがゆっくりと進んで行く姿が見える。どうやら反対側の住宅地のどこかで道路工事が何かが行われているようだ。天気予報を確認すると、今日まで天気が優れないが、明日からは一転して天気が良い日が続く。ただし、いよいよ気温がぐっと下がり、最高気温は0度近くとなり、最低気温はマイナスの世界に突入する。来週の水曜日には雪マークが付いている。

今朝方の夢について少しばかり思い出している。今朝方も二つの印象的な夢を見ていたのだが、それらの情景の細部については覚えていない。とりあえず、覚えている範囲のことを書き留めておこうと思う。

一つ目の夢の舞台は、実際に通っていた中学校であった。私は体育館の中にいて、一人でバスケの練習をしていた。しばらく一人で練習をしていると、二、三人の友人が体育館にやってきて、少し雑談をしてから、みんなでバスケを楽しむことにした。最初の夢に関して覚えているのは、それぐらいしかない。最初の夢が終わりに向かったとき、一度目を覚まし、そこでトイレに行った。そのときに、この夢から何かを一つ大きな気づきを得たことに気づき、それをメモしておこうと思ったのだが、結局それをしなかった。バスケをしている夢を通じて自分が得たことが何だったのか。今はもうその気づきを取り出すことができない。ただし、その気づきが一度自分の内側に通ったことをは確かである

ため、また何かのきっかけでその気づきを思い出すだろう。二つ目の夢は、その場面設定はもう一切覚えていない。

だが、夢の中で私は、作曲実践をしていたのを覚えている。不思議なことに、頭にメロディーが浮かぶ都度、それが内的ヴィジョン、ないしは心的イメージとして心の中でありありとそれを捉えることができた。そのイメージは、メロディーが絵画のようなものに変換されていたわけではなく、純粋に、楽譜上にそのメロディーが音符の流れとして進行していく姿を捉えたものであった。夢から覚めて、しばらくベッドの上で仰向けになっている時にも、まだそのメロディーが消えることはなく、私はそれを脳内で何度もロずさんでいた。そして、脳内のみならず、実際にそのメロディーをロずさんでいる自分がいた。それは、とても穏やかな心にさせてくれるメロディーだった。

今朝方はそのような夢を見ていた。特に、二つ目の夢は印象深い。いよいよ、夢の世界にまで作曲行為が深く浸透しているのだということに気づかされる。これからさらに作曲実践を継続させていくことにより、無意識の領域にある音楽世界は、今よりもより豊かなものに耕されていくだろう。今後は何らかの手段を用いて、夢の中で現れたメロディーを記録しておき、それを用いて作曲をしたいと思う。
フローニンゲン：2019/1/17（木）08:04

No.1582: In the End of a Starry Night

In the end of a starry night, I wish tomorrow to be the same as today that made me feel a sense of fulfillment. Groningen, 20:59, Thursday, 1/17/2019

3692. 今日の計画

時刻は午前八時を迎え、辺りはうっすらと明るくなってきた。今日は断続的に小雨が降るようだが、昼食前には近所のスーパーに行って、食料の買い足しをしておこうと思う。

気がつけば、今週もすでに木曜日となっており、平日は今日と明日だけとなった。毎日が、絶え間なく流れる水のごとく、緩やかに流れていく。一月も半分を過ぎ、二月がやってくる足音が聞こえて来る。

今日はこれから、いつもと同じように、早朝の作曲実践に取り掛かる。早朝の作曲実践は、一日のリズムを形成する上で極めて重要な実践となった。早朝の作曲実践のおかげで、その日一日がより音楽的なものに変貌し、この世界を音楽として感じながら生きる喜びをもたらしてくれる。

今目の前に見えている景色が、時間の経過と共に刻一刻と姿を変えていく様子は、さながら転調のようである。景色の転調を眺めていると、この世界はますます音楽的なものに思えてくる。早朝の作曲実践を終えたら、まずはアーノルド・ショーンバーグに関する論文を読みたい。これは数日前にダウンロードしたものであり、それを午前中にまず読む。その後、過去の日記の編集を進めていきたいと思う。現在、毎日着実に日記の編集が進んでおり、完全にペースを掴んだように思う。とりあえずは、今執筆している数の日記に追いつくように編集を進めていこうと思う。それを焦って行う必要はなく、自分が決めた分量を毎日編集していくだけで良い。何よりも継続が重要であり、小さなことを積み重ねていくことが大切である。

午後から誰に範を求めて作曲実践を行おうか、早朝のこの時点では決めかねている。候補としては、バッハかラヴェルだろうか。ここ最近は、ドビュッシーに範を求めることがほとんどなかったので、ドビュッシーの曲を参考にしてもいいかもしれない。午後の作曲実践は、たいていその時の気分によって、誰のどのような曲を参考にするかを決めている。今日もそのような形で実践をすることになりそうだ。

作曲実践を重ねていくことと、それに並行して、音楽理論を学習することを怠らないようにする。今日は、ウォルター・ピストンが執筆した、ハーモニーに関する専門書を読み進めていく。これは以前に、一、二度、全体を通して読んでいたこともあり、今日は自分の関心テーマに関して、深く読み込んでいこうと思う。本日は辻邦生先生の日記からは離れ、英語空間に浸るような日としたい。フローニンゲン：2019/1/17（木）08:19

No.1583: Courage for Living Today

Living inevitably contains a moment of doubt, but it also embraces more courage than doubt.
Groningen, 08:04, Friday, 1/18/2019

3693. アーノルド・ショーンバーグに関する論文を読んで

時刻は午前11時を迎えた。早朝は、晴れ間が広がっていたのだが、そこから一転して、今はしとしととした雨が地上に降り注いでいる。

早朝に作曲実践を行い、少しばかり過去の日記の編集をした後に、ショーンバーグの音楽に関する論文を読んでいた。この論文は、ショーンバーグが調整の無い曲についていかような思想を持っていたのかを解説したものである。

音楽理論に対する私の理解は、まだまだ微々たるものだが、それでもこの一年間、独学で理論を少しずつ学び続けてきたおかげもあり、今となってはこうした論文を読めるようになってきていることは非常に喜ばしい。作曲実践を本格的に始めてからちょうど一年が経ち、この一年間探究を続けてきたことが、少なからず自分の身になっていることを実感する。この論文を読みながら、随分と考えさせられることがあった。一つは、調性の機能は統合化と分節化だというショーンバーグの指摘についてである。

統合化と分節化というのは、まさに発達の原理に他ならず、この点においても、音楽の中に発達現象を見出すことができる。ショーンバーグは、調整の機能をこの二つの点に見出したが、それは調整の無い曲にも当てはまると指摘している。

調整の無い曲は、調整のある曲とは異なる形で、統合化と分節化が行なわれている。調整の無い曲は、決してまとまりの無い曲なのではなく、12音技法を用いる場合であれば、それは基本形に端を発したまとまりを持つ。この点に関して、調整のある曲と無い曲との間にある、統合化と分節化の差異についてはより探究を深めていきたい。端的には、両者の発達プロセスの違いに関する探究をし、探究成果を自分の作曲実践に取り入れていきたいと思う。

論文を読みながらふと、私が日々行っている作曲実践は、単に過去の偉大な作曲家の作品を模倣しているというよりも、それはオマージュの創作に近いかもしれないと思った。オマージュというのは、敬意を表する芸術家の作品に感化されて生み出された作品のことを指す。これからも無数のオマージュを作り続け、その過程の中で、少しずつ自分の作曲語法を確立していく。

今日はこれから、昼食前に近所のスーパーに買い物に行く前に、12音技法を活用した曲を一曲ほど作りたい。そこでもオマージュを作ることを意識する。

音列に関する基本形は、ショーンバーグの既存の曲のいずれかと同じものを作り、モチーフは他の作曲家の曲を参考にしていく。ショーンバーグは、楽曲を基本形の変化から成り立つものだとみなしていた。そして、ここでいう変化とは、基本形が徐々に新しさや多様性を生み出していくことを指しており、楽曲とは基本形の発達に他ならないと言えるだろう。

午後からも引き続き、音楽理論に関する書籍を読み進めていきたいと思う。ここに今の自分の大きな情熱がある。フローニンゲン：2019/1/17（木）11:24

No.1584: A Royal Ballroom

The setting sun is dancing in a ballroom of the sky. Under the sun, we are dancing, too.
Groningen, 15:51, Friday, 1/18/2019

3694. 神々の音を求めて

時刻は午後七時半を迎えた。今日もゆっくりと終わりに近づいている。今この瞬間のフローニンゲンは、とても穏やかな夜の世界が広がっている。だが、今日は本当に天気の移り変わりが激しい一日だった。

早朝に小雨が降り、それが止み、曇り空になった。そこから再び雨が降り始め、雨が止むと共に太陽の光が強く差し込んできたのが午後だった。そこから、大量のあられが降ってくる時間帯があり、青空が見える瞬間を挟んで、今度は正真正銘の雪が降り始めた。そのように天候が目まぐるしく変わる一日であった。

明日の最低気温はマイナス3度とのことだが、幸いにも明日は晴れるようであり、夕方には行きつけのチーズ屋に足を運びたいと思う。天候の変化が激しいと書いたばかりなのに、今度はみぞれ混じりの雨が降り始めた。風の強さに相まって、みぞれ混じりの雨が横殴りに降っている。

今日一日を振り返ってみると、非常に充実した一日であった。とりわけ、十分な作曲実践に従事でき、それに合わせて、ハーモニーに関する専門書を読むことができたことが、今日の充実感のカギを握っている。

毎日が、充実感と共に発見の連続であることに改めて驚く。毎日必ずエウレカ体験が起きており、自己に関する発見と、作曲上の発見が相次ぐ。日々は発見の連続であり、日々は発見で構成されていると言っても過言ではないかもしれない。こうした絶え間ない発見も、日々の充実感と幸福感と切っても切れない関係にあることがわかる。

今日は午前中にふと、神々の音、ないしは超越的な音を求めて探究を続けていこうと改めて思った。それは究極的な到達地点なのかもしれないが、最近私は、人知を超えた音がこの世界に存在していると思うようになっている。同時にそれは、人の手によって生み出すことができるということにも気づき始めている。より正確には、それは確かに、極限まで涵養された音楽的知性によって創出可能な音の世界なのだが、そうした音は、もしかしたら超越的な世界から召喚すると言った方が正しいかもしれない。そうした音を召喚するにはどうしたらいいのか。それがまさに私の探究上の大きな関心事項だ。

これは一見すると、空想事のように思えるかもしれないが、私は、それをとても現実的なことだと思っている。おそらく、そうした音を召喚するヒントは、霊性学やトランスパーソナル心理学の中にあるだろう。そうしたところまではすでに見えている。あとは、巨大な建築物として構築されている音楽理論の体系を紐解いていき、それと合わせて、実験的な作曲実践を継続させていくことが重要になるだろう。今日これから行う本日最後の作曲実践も、まさにそうした神々の音を召喚するための貴重な一歩になるだろう。フローニンゲン：2019/1/17（木）20:00

3695. 創意工夫の精神と形を生み出すこと

今朝は五時過ぎに起床し、五時半頃から一日の活動を始めた。起床して、いつもと同じようにヨガの実践をした後に、少しばかり調べ物をしていた。そうこうしていると、午前六時を回り、六時半に近づいていることに気づいた。天気予報を確認すると、今日から晴れの日が続く。ここ数ヶ月間は、天気の悪い日が続いていたため、このように連続して晴れの日がやってくることを本当に有難く思う。

ただし、今日の最低気温はマイナス3度とのことであるから、寒さは厳しい。とはいえ、そうした寒さよりも、私にとっては、太陽の姿を拝める喜びの方が大きい。夕方に、散歩がてら行きつけのチーズ屋に足を運びたいと思う。

欧州での生活もすでに三年目であるから、冬の過酷さに対しては、慣れたと言えばそうである。今回の冬は、自分のなすべきことに淡々と取り組む中で過ぎていっている。

以前知人の方が、欧州の人々の冬の過ごし方について言及していたのを思い出す。欧州では、冬が厳しいために、人々は色々な工夫をしながら、冬の厳しさを和らげているというものだ。そこには物質的な工夫のみならず、精神的な工夫も含まれている。それは、ちょっとしたイベントの形を取り、そうした楽しいイベントを通じて、過酷な冬を乗り越えていく。そのような話を知人の方から聞いた。

もしかすると、欧州において発展した芸術の文化というのは、こうした冬の過酷さがもたらす創意工夫の精神と何かしらの関係があるかもしれない。端的には、現実世界の過酷さが、芸術に強く影響を与えるのではないか、ということである。確かに、私自身も、欧州での気候的かつ精神的な過酷さを一年目に経験したことによって、作曲実践を始めたと言えなくもない。置かれた環境に影響を受けて、自分の内側にある創意工夫の精神が呼び覚まされる形で、作曲実践に乗り出したと考えてもおかしくはない。そのようなことを考えていた。

今日は午前中に、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングが一件ほどある。早いもので、今回のプロジェクトも佳境に入り、今日を除けば、残すところあと一回ほどのミーティングとなった。三月中にはプログラムが完成をし、四月からそれを世に送り出すことができそうだ。このようにして、協働プロジェクトが円滑に進んでいき、気がつけば、新たな形を残していることに改めて驚く。

全てが静かに進行していき、着実にひとつひとつが形になっている。形を残していくこと。これは協働プロジェクトに関しても大切にしていることであり、書籍や日記の執筆、さらには作曲においても大切になる考えだ。

今日もまた、過去の日記の編集と日記の執筆に時間を充て、何よりも重要な作曲実践にも旺盛に取り組んでいきたいと思う。外は依然として闇が広がっているが、今日もまた充実した一日になるだろう。フローニンゲン：2019/1/18（金）06:34

No.1585: A Path of Well-Being

I can feel that I always have a sense of well-being which is not intense but modest. Groningen, 21:21, Friday, 1/18/2019

3696. 友人のギャンブルとインドの森に関する夢

昨日と今日の夢は、それほど印象に残っているものではなかった。ここしばらくの間は、夢が強く印象に残っており、それを書き留めていることが多かったように思う。

今朝方の夢は、昨日の朝の夢と比べれば、印象は少しばかり強く残っているが、この二日間は総じて、夢の世界が落ち着いている。今朝方の夢の振り返りがまだだったので、少しばかり振り返っておくことにする。

夢の中で私は、幾分古びたマンションの一室の中にいた。そこにはいくつか部屋があり、中は広い。いくつか部屋がある中で、私は廊下を歩いて、ある部屋の方に向かった。そこでは、小中学校時代の何人かの友人たちが、カードゲームを行っていた。どうやら、ギャンブルとしてそのゲームを行っているようであり、皆の顔は真剣だった。その中で、一人の友人(KF)が、何やら深刻そうな表情を浮かべている。どうやら、先ほどまでのゲームで幾分負けが続いているようだった。そこでその友人は、大勝負に出るために、カネを借りて再びゲームに参戦する覚悟を決めたようだった。

話に聞くと、彼は六億円ほど借金をしたらしい。私はそれを聞いて少しばかり驚いた。というのも、目の前で行なわれているゲームがそれほど大きい金額を動かしているようには思えなかったからであり、さらには、彼の性格や能力などを考慮すると、このゲームで勝つことはほぼ無理だろうと思っていたからだ。

六億円を借りた彼の様子は、随分とビクビクしているようであり、「これは負けだな」と私は思った。そもそもこうしたゲームをするのであれば、余剰資金の一部を用いて行うべきであり、多額の借金をして行うようなものではないと私は思っていた。

このゲームを取り仕切っていたのは、別の友人であり、彼はまた、六億円の借り入れに関する契約書を作成する担当でもあった。その部屋を改めて眺めると、部屋の左から右にかけて一本の紐が

張られており、その紐に二枚の契約書がくくられていた。どちらも、その六億円に関するものであった。一枚は借り入れ人用、もう一枚は貸し出し人用のようだった。見ると、その二枚の契約書は日本語ではなく、オランダ語で書かれていた。だが、それはとてもお粗末なオランダ語であり、「こんな契約書で大丈夫だろうか？」と私は疑問に思っていた。

よくよく契約書を眺めると、オランダ語で一行ほど書かれていた文字が変化していき、最後には英語で、「thin thin thin」という文言になった。その文言を目にした時、このカードゲームが、ある暗号資産をもとに構築されているものだと知った。すると突然、私は部屋の中から屋外に瞬間移動していた。目の前にはパチンコ屋のようなものがあり、外から中を覗くと、その暗号資産がその店で採用されたことを祝うようなイベントが派手になされていた。そこで夢から覚めた。

実際には、上記の夢の前に、もう一つ別の夢を見ていた。そこでの舞台はインドだった。私はインドに行くつもりはなかったのだが、乗っていた列車の路線上、どうしても一度インドで降りる必要があった。インドのとある駅で降りた瞬間、そこは大学キャンパス内の広大な森の中だった。

遠くの方に大学の校舎が見えたのだが、周りは森ばかりであり、随分と日が暮れていたため、辺りはとても薄暗かった。森の中の一本道を歩いていると、横の森を横切っていく形でインド人の学生が歩いている姿が見えた。あるところで、私は一人の男子学生に声をかけられ、また別のところでは、女子学生に声をかけられた。今となっては彼らと何を話していたのか定かではない。辺りが暗かったことと、その森がどこか鬱蒼とした雰囲気を持っていたことが印象に残っている。フローニンゲン：2019/1/18（金）06:56

No.1586: A Knock of Winter

Winter is knocking the door not only of severer winter but also of spring. Groningen, 09:13, Saturday, 1/19/2019

3697. 気づきと夢の神様

つい先ほど、昼食を摂り終えた。天気予報の通り、今日は晴れであり、午前中から太陽の姿を拝むことができている。部屋にいたとしても、太陽の姿を眺め、その光を浴びれることは嬉しいことである。

これから午後の仕事に取り掛かり、仮眠を取った後にでも、散歩がてら行きつけのチーズ屋とスーパーに足を運ぼうと思う。曇りや雨ではなく、久しぶりに晴れの日にチーズ屋に訪れることになったので、店主と少しばかり晴れた天気を祝おうと思う。晴れという何気ない現象が、このように祝いの対象となり、晴れを他者と喜び合えるというのは素晴らしいことだと思う。天気が晴れやかなことに影響されて、自分の気分もとても晴れやかだ。

今日は午前中に、協働プロジェクトに関するオンラインミーティングがあった。ミーティングを終え、少しばかり考え事をしていると、ふと、とりとめもない考えが浮かんだ。

「チャンスの神様に後ろ髪はない」という言葉を聞いたことがあるかもしれない。この言葉は、ギリシャ神話におけるカイロスという神に由来している。カイロスには前髪しかなく、やってきたチャンスを逃したら、そのチャンスは二度とやってこないということを指して、「チャンスの神様に後ろ髪はない」という言葉が生まれたようだ。ここでふと、それはチャンスだけに当てはまる事柄ではなく、気づきにも当てはまるのではないかと思ったのだ。

そうした考えが生まれた背景として、私たちは毎日を生きる中で、様々な気づきを得ているはずなのだが、それを捕まえないがゆえに、つまりそれを文章として書き留めておくなり、あるいは他の手段を通じて形として残しておかないがゆえに、せっかくの気づきがどこかに消え去ってしまい、自己を深めることに何ら寄与していないという現象を挙げることができる。

一つ一つの気づきは、絶えず新たな気づきとつながっているものであり、気づきは何らかの形になることによって、新たな気づきを育んでいく。そして、そうした気づきの連鎖が自己を深めてくれる。そのようなことを考えていると、気づきというのは、それが生まれた都度、できるだけ形として残しておくのが望ましいように改めて思えてきた。私の場合で言えば、それは今このようにして執筆している日記として気づきを形として残し、曲や絵の形で気づきを残しておくのもいいだろう。

いずれにせよ、気づきというのはそれが生じたときに、その都度形として残すことが重要になるだろう。そうしなければ、気づきの神様はすぐに逃げて行ってしまう。文章の執筆や作曲を通じて、気づきの神様を捕まえるというよりも、挨拶するような心持ちで実践を継続していく。こうしたことは、毎朝書き残している夢についても当てはまるだろう。夢も書き残しておかなければ、それはすぐさま無意

識の世界のどこかに消え去ってしまうのだが、それをきちんと書き残しておくと、それは後ほど、自分でも驚くほどの大きな自己発見をもたらすことがよくある。そうした自己発見が起きるのも、夢を形にしておいたからだと言える。「チャンスの神様だけではなく、気づきや夢の神様にも後ろ髪はない」そのようなことを改めて思わされた。フローニンゲン：2019/1/18（金）12:55

No.1587: A Winter Caramel

It is beautifully fine today. The outside world is melting with joy; it looks like a caramel.
Groningen, 15:10, Saturday, 1/19/2019

3698. 冬の輝き

時刻は午後五時半を迎えた。今、夕日が沈み、これから闇夜が訪れる。一月も半ばとなり、随分と日が伸びたように感じる。もちろん、これまでがあまりに短すぎたのかもしれない。とはいえ、日が伸び始めていること、そして太陽の姿を拝む日が増えていることは、本格的に寒くなってきた今日この頃においては朗報だ。

今から一時間半ほど前に、行きつけのチーズ屋に立ち寄った。チーズ屋の店主も、いよいよ寒さが厳しくなってきたと述べた。これから三月を迎えるまで、寒さのピークが続く。だが、上述の通り、その分晴れの日が増え、日が伸びてくることはとても喜ばしい。

夕日が沈む姿を眺めていた時、それはどこか、空の舞踏場で踊っているかのように見えた。また、夕日の下で、私たち人間も含めて、多様な生物も踊っているかのように思えた。

チーズ屋に足を運ぶ前に仮眠を取っていたのだが、その最中に作曲をしている自分がいた。目を閉じたまま、心の中に浮び上がる心象イメージを通じて作曲を行っていたのである。実際に、作曲ソフトの画面が心の中に現れて、そこで音を並べている自分がいた。数日前の日記で書き留めたように、夢の中でも作曲をしていることが最近あった。このように、自分の深層的な意識の中に作曲実践が流れ込み、音楽世界が拡張していることを見て取ることができる。

先ほど辻邦生先生の日記を読みながら、自分が作曲をしているのは、やはり日々の中に生の歓喜を見出すためであり、そしてそれを形として残しておくためなのだと思った。あるいは、自己及びこ

の世界を純粋に映し出す仏法を見出すために作曲実践を行っている言い換えてもいいかもしれない。

自己を純粋な存在に近づけていくために、自己の内側から湧き上がるものを絶えず形にしていく。そうした積み重ねが、自己の純粋化を促し、存在を光に近づけていく。

辻先生は、仏法とは存在の光であると述べている。その点を考慮に入れると、作曲という営みは、自己を光に近づけていくための行為であり、同時にそれは、仏法に至るための行為であるとも言えるだろう。そのようなことを先ほど考えていた。

これから夕食までの時間を使って、ハーモニーに関する書籍と、できればメロディーに関する書籍を読み進めていきたい。夕食後に、本日最後の作曲実践を行った後にも、時間を作って二つの書籍を読み進めていく。それらの書籍を読むのは、作曲上の観点を得るためであり、実際に作曲で活用できないような知識を肥大化させることではない。そのため、適度なところで二冊の書籍から離れ、就寝前はゴッホの手紙の続きを読み進めていこうと思う。フローニンゲン：2019/1/18（金）17:44

3699. 幸福は水の如し・呼吸の如し

幸福は水の如し。幸福は呼吸の如し。入浴前にそのようなことを思った。

日々の生活を改めて振り返ってみると、毎日、強烈な幸福感というよりも、絶えずなんとなく幸福な感じが続いていると言える。この「なんとなく」というところが妙に重要であるような気がしている。確かに、私は時折、はち切れんばかりの幸福感を突如感じることがあるのだが、それは毎日のことではない。だが、毎日感じているのは、水のような幸福、ないしは呼吸のような幸福である。空気のような幸福というよりも、空気を体内に取り込む呼吸という行為が持つ特性と幸福感が相まっているような感覚が、日々の自分を取り巻いている。

幸福感について考えを巡らせていると、少し前に、フローニンゲン大学の経済地理学の研究者が、生活場所と幸福の関係について調査した結果について思い出した。それはかなりマクロな調査であり、国を単位としてなされていた。ヨーロッパ諸国においては、北欧の幸福度が高いと思っていた

のだが、その調査結果では、ノルウェーやフィンランドよりも、オランダ、アイスランド、デンマークの人たちの方が日々を幸福に生きていると感じている割合が高かった。

昨夜も就寝中に、オランダという進歩的な国での暮らしの在り方について少しばかり考えていた。その調査を行った教授は、個人の幸福は、その人を取り巻く人々の幸福感と密接に関係しているということも指摘していた。

オランダで生活する中で、私が幸福感を日々感じているのは、自分の生活の送り方だけではなく、周りの人たちも幸福だと感じているからなのかもしれない。もちろん、オランダにおいても経済水準が低い人たちはいるだろうが、この国の福祉政策によってか、確かに、街中に不幸そうな顔をして歩いている人をほとんど見かけない。私自身が常に幸福感の膜を帯びているからそのように見えるだけかもしれないが、この三年間において、街中で不幸そうなオーラを身にまとった人を見かけたことはないように思う。

今のところの予定では、この夏からは一旦オランダを離れ、再び米国で生活を送るか、スイスで生活を始めようと考えている。しかし、米国かスイスを経由した後には、再びオランダに戻ってこようと考えており、それはやはり、この国を取り巻くなんとも言えない幸福感なのかもしれない。それは決して華美な幸福感でも強烈な幸福感でもなく、極めて質素な幸福感なのだが、これこそが幸福感の核なのかもしれない。それこそが、生活に真に根ざした幸福感だと呼んでいいのではないかと思う。

私がオランダに居心地の良さを感じているのは、こうした生活に深く根ざした幸福感があるからなのだろう。それはとても静かであり、この国の芯から滲み出してくるような幸福感である。オランダにも政治経済的な問題は確かにあるが、人々の生活の根底に幸福感があるというのは、とても重要なことのように思う。フローニンゲン：2019/1/18（金）19:59

3700. 感覚が劣化している現代人：日本語と存在の深まり

時刻は午後八時を迎えた。辺りは穏やかな闇が包んでいる。今日は一日を通して晴天であり、太陽の光を存分に浴びることができた。明日からも天気が良い日が続くので何よりである。

そういえば、今日は午前中に少しばかり雪が降っていたことをふとを思い出した。それは積もるほどの雪ではなく、数分ほど空から降ってくるような雪であった。ちょうど、協働者の方々とオンラインミーティングをしている時に雪が降り始め、ミーティングをしながら窓の外の雪を眺めていたことを思い出す。

今日も相変わらず、雑多なことを考え、その中で少しでも重要だと思うものを絶えず日記として文章に書き残しておいた。また、感覚的に重要なものはほぼ全て曲の形で表現していたように思う。

「感覚」という言葉を聞いた時、そういえば数日前に、現代人の感覚の狂いについて考えいたことを思い出した。身体感覚にせよ、危険察知感覚にせよ、金銭感覚にせよ、現代人はことごとく感覚的に鈍感になっているという印象を拭うことができない。

私は日々、よく小鳥や犬や猫などを観察しているのだが、彼らは現代においても優れた感覚を維持している。それに比べて現代人は、随分と感覚の中にバグが混入してしまっているようだ。

細かな話で言えば、朝目覚まし時計で目覚めるというのは、確実に何かの感覚が狂っているからだろうし、目覚ましで脳に強烈な刺激を与えることを繰り返せば繰り返すだけ、特定の感覚が衰えていく。また、食物の選択に関しても、明らかに毒物としか言えないものが微量に入っているのが現代社会の多くの加工食品だと思うが、そうした毒物を敏感に察知し、そうした食品を避けるという行動や、さらにはそうした食の危機を指摘するような行動が起きないというのもまた、何かしらの感覚の劣化から生まれているように思う。

意識の発達を云々するよりも前に、生きていく上で必要最低限の感覚を取り戻すことが先決のように思えるのは私だけだろうか。

気づけば、今日は六つほどの日記を書き留めていたようだ。一つ一つの日記は短く、多くても原稿用紙四枚（1,600字）ほどに留めるようにしている。短いものは大体1,000字ほどだ。そう考えてみると、今日は6,000字以上の日記を書いていたことになる。日々こうした小さな日記を絶えず書く中で、自分が着実にどこかに向かっていることを感じる。また、そこに向かわせる流れというものが存在していることにも気づくことができている。それらはどれも、文章を書くことによってもたらされているものだ。一方で、今日の午後に、日本語をより深めていく必要性について考えていた。

© YOHEI KATO 2019

いつも述べているように、日本語を深めていくというのは、存在を深めていくことと同義である。自らの日本語を深めていくためには、咀嚼された経験の堆積による存在の深化が不可欠である。

自分の日本語に対して絶えず反省を強いられているというのは、自分の存在の深さに対して反省をしていることと同じだということがわかる。日本語の深まりと存在の深まりの双方は、相変わらず、全くもって道半ばであるが、明日もまた、日記を執筆することを通じて、少しずつそれらを深めていこうと思う。フローニンゲン：2019/1/18（金）20:18